

入口のこと

修行の深さとは心、技、身、なかんずく心を鍛えるものである。深さすなわち
度量である。

試合より、学ぶ度量とは、
「他より優れたら
という自尊心、気位を会得し。「負けたるを知って」おごり、たかぶり、悔りを
戒め、いたわりの心が湧き。「進みたるを知って」
「退
くことを知って」下がる時期、すなわち引き際のいさぎよさを知る。
これものの入り口のこと。

一等の資質

自分は強く、正しく、そして多くの事を識っていて、他を常に親切に導き、範
たるをもって、指導していると思っている段階は、
教えているはずの自分のほうがむしろ教えられていることが多いことに気づ
き、心を傾けることができるようになったとき、二等の指導資質といえよう。
一等の資質とは教えているはずの弟子の方が、
優しく
手をのばし、それを受けることが、至極自然にできるようになった時、師とい
われてもいいだろう。

許容

門人のあやまちは、その程度によるが、許容は二度までのこと。

一度目は修業中のことゆえ、未だ未熟という配慮が必要であり「大心」でみる

ことである。これを「涵養」の・・・
二度の

あやまちは、さらに控えて、自らの指導手順。不手際であるという己の不徳を
反省する事にある。

三度目は、有無なく、
手間がかかり過ぎる。

寛容と優柔不断とは、紙一重、ということ。

歯車

常に大道につき物事を考えること。

小異小事を、取り上げて、
これ罪悪である。

また小事にこだわりすぎでは進む歯車まで狂わす。

これが初心のうちには笑事ともいうが、年半ば、過ぎたる者にありては、愚かも
のといわざるを得まい。規則、法というが、たかだか人が作ったもの。まずは
世間の暮らしむきがためにあるはず。なかんずく、二ツと迷いたる時は、

しかと見抜く心を常々養うが肝要。

下札

士道とはおよそ、礼によって始まり、礼によって終わる。などと聞いた風にいうが、そもそも礼とは、「習慣」また「作法」がごときに心得違いをいたしてはいけない。

礼とは己の心である。およそ世間とは、己の心、技、身を磨くがところ。

いずれの場に臨みてもまずは、右下の角を見て、さらに左の角、左上そして右の上、その四角により、出来たる空は、これ、神宿したる己の心を清めるが処、おのずと頭(こうべ)は下がるもの。また、世間は己が鏡。己が斜となり、後ろをむけば後ろを向く。

不覚

修行中たるもの、たまさかのよりあいにて、興奮の勢いを借りるなどあれば一生の不覚。何事にも無礼講はない。

ものたしなみ方は個々にその差はあれど、いずれのときにせよ、それら席に臨みて、なりふり忘れたる所作、すべからく修行不足のゆえ、昨今ややもすると、鷹揚に構えながら、
観察するが場所。
しかして、何事にも蚤声を震わし、肩を揺するがこと、すなわちこれ恥するべき振る舞い。

生涯完成

道の中において、道を学ぶもの。道とは、歩む道。すなわち順序にある。士道の順序にある段級とは、強さの表現ではない。
なかんずく、我慢強さという人間としての強さの称であろう。中途半ばに投げ出したものが段級は進む事はない。
人生の目的は、生涯完成にある。修行居たりて、
途中で投げ出さなかつたという証左である。

一度しかない人生、生涯完成に努めてもらいたい。

己の恥

修行中の心得―勝敗、判定、指導、人格、愚痴、批判、不足を、言うも聞くも謹むよう。

事左様は未熟者に限ったこと。戦いで負けたるはこれ己の不足。

技量ののび悩みはおのれの工夫のなさ。人とのいさかいは己の徳のなさ。愚痴は己の泣き言。

夢々他人様の責いうべからず。一步譲りてかりそめに師、先輩に欠けたるところありたりとするならば、弟子はそれを黙って補って至極 当然。たいそうに言うはよくよくあるまじきこと。

一門のこと人から聞くも人にいうも、
しかと、心すること。